第１回まちづくり戦略会議

平成 16 年 6 月 28 日

午後 2 時～午後 4 時

本館 301 会議室にて

司会

本日はお忙しいところお集まりをいただきましてありがとうございます。大熊委員につきましては遅れるとの連絡をいただいております。

ただいまより第１回まちづくり戦略会議を開催いたします。

私この会議の事務局を務めさせていただいております企画部土地利用担当部長の渡辺でございます。しばらくの間、司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめにお手元の資料の確認をさせていただきます。

次に、本日の会議の会議録を作成する都合がございますので、この会議を録音させていただきたいと思います。あらかじめご了承いただきたいと思います。

それでは、開会にあたりまして篠田市長からご挨拶を申し上げます。

篠田市長

本日は大変お忙しいところお集まりをいただきましてまことにありがとうございます。皆さんお忙しい方に集っていただいているということで恐縮に思っています。

いま新潟市は合併協義、最終局面ということで、今回の６月新潟市議会、そして新津市議会さんで合併に関する廃置分合などの議決をいただけば､13 市町村 78 万都市が来年３月 21 日に誕生するということが事実上確定するということになります。

もう１つ、巻町さんが若干不確定要素でございますけれども、これについても来年の合併、そして２年後の政令指定都市移行ということに差し支えなく協議ができるかどうか、あるいは協議をクリアするハードルといいますか、課題について早急に決めてまいりたいと思っております。

巻町さんの部分は、岩室さんが飛び地になっているということを考えれば、近い将来には合併をすべき地域だろうということで、これは 12 市町村長さんのご意見も聞かないと、なんといっても 13 市町村の団結が一番大事だという観点で、近く結論を出してまいりたいと思っています。

今回のまちづくり戦略会議、これは今まで新潟市が合併協義の中で申し上げてきた、これからは分権型政令指定都市をつくるんだと、私ども田園型政令指定都市をつくるということを協議の場で確認をしてきたわけですけれども、田園型政令指定都市１つとっても、日本一の大農業都市が誕生して、それが政令指定都市になるということで間違いなく田園型政令指定都市ということですけれども、その実態をつくるにはこれから非常に数多く議論を重ね、生活者と農業者互いに一緒になってよかったなと言ってもらえる田園型政令市の仕組みを考えていかなければならないということです。

分権型政令市のほうも、これもまだまだ看板だけという状況で中身をつくるのはこれかです。

その中でも１つ新しい要素として出てきた地域自治組織、これが今回の国会で５月に合

併関連３法案がとおったということで、地域自治区という新しい考え方が示されました。これについても我々政令市を大きな目標としておりますので、行政区のまとまりというものを大切にしなければならないと感じております。

この行政区についてはおそらく来年の今ごろか、あるいは７月中ぐらいには行政区の姿を行制区画審議会で決めていただいて、それが見えてくる段階に入ると思います。それを踏まえてあと１年半の間で政令市へ向けた準備を進めていく必要があると。

したがってこの地域自治組織においてどういうものを新潟がやるのか、あるいは当面やらないのか、これも近く 13 市町村長で意見交換をしてできるだけ早く方向を決めたいと思っております。その方向も踏まえて皆様方からその方向の中で、どういう分権型政令市に向けたらいいのかということをありうるのか、ぜひご議論をいただきたいと思っております。

皆様方のご議論についてできるだけ私も行政も一緒に参加する中で、皆さまからいただいた意見については次期の総合計画に反映をしていくという形で考えてまいりたいと思いますので、これからの 78 万政令市の中身を我々がつくるんだというお気持ちでぜひご議論いただければと思います。

司会

それでは委員の皆様をご紹介させていただきます。一言ずつご挨拶をいただきたいと思います。

伊藤委員

伊藤です。所属は新潟大学農学部です。ただいま市長のほうからお話がありましたように、大変大きな農業都市が誕生するという、その中身につきましてはまだ私自身はどうなるかわかっていないので、田園型という１つの基本理念というものを大事にしながら、これまでの農業と新しい農業、農村、食糧というものを皆様方と一緒に議論させていただきたい。

及川委員

新潟薬科大学応用生命科学部で環境安全科学の講座を受け持っております及川でございます。私どもの大学は新津に薬学部を含めて全面移転を 18 年の３月に控えておりまして、現在、応用生命科学部が先に入っております。その大学のベースのキーワードはバイオリサーチとバイオマスです。そしてその基本となる核は安全と環境です。その点において本市が田園都市型という政令都市を目指すとき、私共の大学のはたすべき役目もあるかと考えています。また大学側としても大きな関心を持っているところです。

大浦委員

新潟大学の教育人間科学部の大浦でございます。大きな規模の市になっていくということで、教育の規模ということですけれども、学校教育も生涯教育も地域に根ざしたベクトルで考えていかなければいけないので、大きくするけれど、それぞれ地域に根ざすということを、両立していくということを、皆さんの意見を伺いながら考えていきたいと思います。

大川委員

大川でございます。本業は新潟南病院というところで小児科をやっております。子供の問題いろいろありますけれども、この会に関しましては全体的なものを見ていくということで、その中で立場上保健・医療・福祉に目がいくんですけれども、広大な大新潟市になったときにどのようにそこらが出来るのか頭の痛い問題というのが正直の偽らざる気持です。

熊谷委員

日本政策投資銀行の新潟支店長をしております熊谷でございます。私先週赴任したばかりでございまして、突然の大役を仰せつかって身が引き締まっておるわけでございますが、大昔、20 数年前に新人のときに新潟支店の一担当者として５年間ここに暮らしておりました。

先ほども新潟・新津の合併という資料を拝見しまして、私の家内は新津市の出身でございまして、私自身は仙台の出身ですが、こういうご縁を非常に運命めいたものを感じておりまして、非常にびっくりしております。

私がまいりました昭和 50 年の後半のころに新幹線が開通したのをよく覚えておりますし、60 年代になってから、私が新潟を出てからですが、100 万都市構想ということで、新潟が政令都市に向かって歩き出したというのを、だいぶ昔のことですが記憶しておりまして、あれから 20 数年たったということは非常に感慨一入です。

政策投資銀行はご案内のように産業融資ということ、あるいは地域の産業融資ということをやっておりますので、やはり先ほど市長さんのお話にもありましたように、田園都市というような最初のイメージをどういうふうに現実化していくかということを大きな命題の１つということで、あるいは 100 万、78 万ということ、100 万都市、そういった規模の都市というのはそれ自体生き物でなければならないということを私自身思っておりまして、田園都市の中に産業とかまちづくり、広い意味でのまちづくり、あるいは都市開発というようなものも入り込む要素は非常に多いということで、ひとつ地域経営的な発想をもってその地域がひとつの生き物として、生き生きと育っていくという観点から何かアドバイスできれば幸いだと思います。

西條委員

西條と申します。よろしくお願いします。フリーの仕事をしておりますけれども、この間中小企業大学校三条校さんとか新潟県自治研修所の講師のお仕事をしてきました。今回は働く女性の異業種交流会の事務局を８年間やっている関係で参加することになりました。つきましては立場上、私の場合は働いている女性だとか、あとは市民活動という立場、子供が小さいので育児中の母親的な立場でコメントすることができればいいなと思っています。

個人的には、政令指定都市になる際に、周辺市町村の住民の方がどういうふうに思われるのかと思っておりますので、できれば今の新潟市だけではなく周りの方のご意見も伺うことができればと思います。

桜内委員

新潟大学経済学部の桜内文城と申します。私は大学で専門としておりますのは、公会計といいます政府の会計制度ですとか、あるいは財政運営の意思決定の仕方、こういったものをやっております。

新潟市が今後合併をして政令指定都市になっていくにあたりまして、もちろん規模が大きくなるんですけれども、その中でどういうふうな財政上の意思決定ですとか、そういうものをしていくべきかという点で何かしらお役に立てればというふうに思います。

ただ私自身にとっても今後の新潟市が特に財政、あるいは経済の面でどういうふうな運営をされていくのか、そういう点を勉強させていただきたいと思います。

長谷川委員

ミカユニバーサルデザインオフィスの長谷川でございます。私はユニバーサルデザインの考え方でこのまちづくり戦略会議を眺めてみたいというのと、それから NPO でまちづくりとかかわっている関係で、一住民としてどんなふうな役割を担っていけるようになるのかというような思いも両方持ち合わせながらこれからを見ていきたいと思います。

平沢委員

平沢和子と申します。今春まで新潟県消費者協会に所属して県内の主婦の皆さんと消費者運動をやっておりました。今解放されて一会員でございます。家庭生活はこの４、50 年で大変わりしましたけれども、その中で安全、安心を求めていった結果、ここ４、５年は食の安全と環境問題に県下だけでなく、日本全体がそういう傾向になってきました。

その中でこの田園都市を目指していくということは、私ども消費者はあまりにも生産者を知らなすぎて、食というもののありがたさや、農業生産を知る事の精神的栄養を無視した結果が最近起る悲惨なニュースの数々と思います。この田園都市となることは消費者にとりましては、本当に生産者が近間に来た、それがどれぐらいか、エネルギーの浪費をは

じめ、安全な食をはじめ、新鮮な四季折々の野菜にしろ、それから伝統的な食材にしろ、きっと実現性が高いのではないか。そういう意味からも育てていくと住みやすい新潟市の実現があるのではないかと期待しております。

横山委員

横山です。私は定年退職をしまして現役ではありません。第二の就職をしまして、いわば余齢期に入っているというそういう人間でございます。余齢期に入ったことによりまして、学問の世界の縛りから一応開放されておるように思います。

私は主に社会福祉法だとか雇用の勉強をしてまいりました。この勉強の礎は企画ではないんだと。政策提言はしないと、そういう立場をとった現在では大変珍しい、ストイックな考え方を持っております。

大学しか知らない人間でありまして、これからしばらくするとリラックスせざるを得ない年齢になります。リラックスするときにお前何も世間を知らなかったのかといわれると大変恥ずかしい思いがしますので、いいチャンスだと思いまして、実社会を見て、実社会を垣間見て、そして次の人生を歩もうと思っております。そういう意味で参加しました。その意味ではほかの先生方と大変スタンスが違う、ゆっくりとした姿勢で臨みたいと思います。

与田委員

新潟商工会議所政令都市推進特別委員長の与田でございます。先ほど熊谷さんのお話にありましたように、100 万都市構想というのを商工会議所が出したのが平成元年でございます。そのときから私委員でございまして、もう 16 年やっておりますが、９年からその 100 万都市構想特別委員会の名前が解消されまして、政令都市特別委員会になって私がその委員長になったとこういう流れでございます。

私は商工会議所としてこの地域の提言をいろいろやっておりまして、パンフレットをつくっておりますが、新潟市に関しては政策委員会と共同いたしまして、これは前の支店長の石森さんが副委員長をやっておりまして、新潟市についてはバイオ・食、コンベンション・観光、それから介護・福祉と、こういう３つの柱を建てまして、こういう新潟市をつくってくださいと市にお願いをしておりますし、また会議所としてもゲートウエイ都市新潟という、アジアに向かったゲートウエイ商工都市を目指してやっておると。これらのこともぜひいろんな形で盛り込んでいただきたいと思いまして、この会議で発言をさせていただければなと思います。

大熊委員

大熊です。私は新潟大学の工学部の建設学科で土木工学を教えております。土木は開発ばかりでなくて、自然を大切にするという側面もございまして、私はどちらかというと自

然を守っていこうという立場で今までやっておりました。
　今申し上げた文化財とか歴史とか自然とか、それから新潟でいうと水と、そういう観点からまちづくりにお手伝いできればと思います。

司会
　それでは次第に従いまして座長の選出に移らせていただきます。座長につきましては委員の皆様の互選でお願いをしたいというふうに思っておるところでございます。なお、副座長につきましては、座長が選出された後に座長から指名という形でご選出をいただきたいと思っております。よろしくお願いをいたします。
　それでは座長の互選をお願いいたしたいと思いますけれども、選出方法についてはいかがいたしたらよろしゅうございますでしょうか。ご意見ございましたら。

大川委員
　今一通りご挨拶をいただきましたけれども、もし事務局のほうで案がございましたら、いただいたほうが時間の節約にもなりますのでいかがでしょうか。

司会
　今ほど大川委員から事務局案はというお話がございましたが、ほかに意見がございませんようでしたら、そのような形で私どもの案をご披露させていただくということでよろしゅうございますでしょうか。

各委員
　異議なし。

司会
　ありがとうございます。大変僭越ではございますけれども、事務局といたしましては新潟商工会議所の政令都市推進特別委員会委員長でございますし、またさまざまな場でコーディネーターを務めていらっしゃいます与田委員が適任ではないかと考えているところでございますが、いかがでございましょうか。

各委員
　異議なし。

司会
　与田委員よろしゅうございますか。

与田委員
　はい、よろしいです。

司会
　それでは与田委員にお願いをするということで決定をさせていただきます。与田委員、早速でございますが座長席へのご移動お願いしたいと思います。
　それでは以後の進行につきましては与田座長よろしくお願いします。

与田座長
　私のほうからまず第一は、この会議は中身をみますと最終的に報告書をつくるとかそういうのではなくて、実際には皆さんが立案される計画のための素材を提出するという会議だそうでございますので、あまり形にこだわらずに、皆さんから考えていることをどんどん言ってもらいたいということを私としては希望いたしまして、ぜひ活発なご意見を挙げていただいて、もともとこの会議ができてこの先を見ていきますと、まだまだ先行きありそうなので、そのために一番の基になるものを出しましょうと、これがこの会議の目的だそうでありますので、ぜひご協力をいただきまして、楽しく未来のある会議にしていきたいと思います。
　それでは早速、先ほど出ましたように副座長を選ぶわけでございますが、指名でありますので、大熊さんに副座長をよろしくお願い申し上げます。
　それでは事務局のほうから資料の説明をよろしくお願いします。

事務局
　では総合企画課長の井浦でございますが、私のほうから説明させていただきます。
　それでは第１回まちづくり戦略会議資料というもので説明をさせていただきます。まず１ページ目でございますが、まちづくり戦略会議についてということで、設置目的につきましては先ほど市長のほうから挨拶がございましたとおり、新潟市は平成 19 年度政令市への移行を機に新たな総合計画をスタートするということで進めてまいっております。総合計画を策定するにあたりまして、このまちづくり戦略会議を設置しまして将来の都市像やこれからの施策の方向などについてご提言をいただき、総合的に反映をさせていきたいと考えております。
　大雑把なものでございますが、16 年度、今年度いっぱいをかけましてまちづくり戦略会議を開催させていただき、この会議で出ました意見を反映させた形で総合計画の基本構想を策定してまいりたいと考えております。
　平成 18 年には総合計画審議会にかけまして議会の議決をいただき、平成 19 年の政令指定都市移行と同時に新しい新総合計画をスタートさせたいと考えております。新総合計画の一環としましては、現在進めています 13 市町村との合併建設計画との整合性を図る観点

から、８年間の新総合計画を予定しておりますが、戦略会議におきましては現在にとらわれず、長い目で見た新潟市の将来の都市像についてさまざまなご提言をいただきたいと考えております。

２番目の会議の進め方でございますが、検討期間につきましては本日の第１回から来年の３月ごろまでをめどに、おおむね１ヵ月に１回程度の開催を予定しております。前半につきましては将来都市像の検討、後半につきましては施策の方向性ということで、分野別に提言をいただきたいと考えております。構成メンバーについてはお手元の資料のとおりです。

次に２ページ目でございますが、戦略会議で検討いただきます新しい新潟市の都市像についてでございますが、ベースとしては現在配置検討を進めております新しい合併後の新潟市域ということになりますので、新潟市をはじめ岩室村さん等を、豊栄市さんまでのこの色をつけた部分が新しい市域ということで、これを前提に検討いただきたいと考えております。

合併後の人口につきましては約 78 万人となりますし、面積につきましては約 650 平方キロということで、現在の新潟市と比較をいたしますと人口では約 1.48 倍、面積につきましては 2.8 倍、東西方向のおおまかなキロ数については 33 キロあるものが 42 キロになりますので、約 1.27 倍、南北方向につきましては 21.1 キロが 34.5 キロになりますので、1.64 倍の規模になるものでございます。

両側の壁にかけてございますが、航空写真を私どものほうでつくりましたが、一番こちらが、福島潟の方向から新潟の市街地を見た写真でございます。おおむね、この写真の範囲は新しい新潟市の北部側の地域となります。

それから向こう側は、新潟の信濃川河口部から岩室村方向、あるいは月潟、中之口の方向を臨んだ写真でございます。弥彦山は新しい新潟市域には含まれませんが、弥彦山の手前の多宝山というところまでが現在の岩室村の村域になりますので、おおむね角田の先のところまでが新しい新潟市域になるという写真でございます。

こちら、皆さんの右手でございますが、今の都市の中心部とそれから福島潟の上のところを見たものを、上下合わせた形で１枚で２つを見ていただこうとつくったものです。新潟市地域はこんなふうになるということで念頭においていただき、今後さまざまなご提言をいただきたいと思っています。

与田座長

これも（新潟ニューステージ）入っていますね。

事務局

ここにも同様な写真が入っておりますのでご覧をいただきたいと思います。

続きまして、資料の３ページでございますが、新しく生まれる新潟市と先行政令市、そ

れから同じく新潟市と同様に政令市を目指す静岡市を含めた15市のデータを比較させていただいたものです。

人口につきましては国調査人口で15市中14位と、78万9,000人ということで14位です。人口密度につきましても同じく15市中14位と。人口社会増減につきましては減少するところがある中で新潟市につきましては、これは静岡市さんのデータがございませんので、全体14市中11位という状況です。昼間人口につきましては15市中10位、老年人口の比率につきましては15市中2位です。年少人口比率につきましては15市中3位という状況です。

次に４ページ目でございますが、土地利用関連です。市域の面積につきましては15市中５位、市街化区域の面積につきましては15市中13位、市街化区域と市域の比率につきましては15市中14位、耕地面積につきましては15市中１位です。

なお水田面積については全国の市町村の中で１番というふうになっていますが、参考までに水田面積の２番目は旭川市です。

与田座長

圧倒的に旭川の２倍ですね。１万ヘクタールに対して２万ヘクタールですからね。

事務局

市域に占める耕地面積の割合も15市中１位です。都市公園の１人あたりの面積については15市中９位という状況です。

次に５ページ目でございますが、道路延長については静岡市が未集計ですので、14市中３位という状況です。

次に産業関連ですが、農業粗生産額につきましては15市中１位です。なおこれは全国の市町村中も1位です。なお２位については豊橋市が２位という状況です。

製造品出荷額につきましては、15市中11位、年間商品販売額につきましては15市中11位、事業所数につきましては15市中13位という状況です。

次に６ページですが、事業所増減率です。平成８年と13年の比較で、15市中６位という状況です。店舗数につきましては15市中11位です。大型店舗数につきましては15市中13位、総店舗数に占めます大型店の割合については６位です。

その他ですが、大学数につきましては、静岡市が未集計ですので、14市中11位、学生数につきましては14市中14位という状況です。

与田座長

この事業所の増減率というのは減ってる方だねみんな、減っている中で減り目が少ないということことだね。

事務局
　そうです。
与田座長
　これはみんなマイナスなんだね。

事務局
　そうです。
　次に７ページでございますが、冒頭申し上げましたように、新しい総合計画のスケジュールということで冒頭説明しましたように、合併建設計画等の関連がございますので、新しい総合計画については平成 19 年から 26 年までの計画をするということです。
　最後８ページですが、総合計画の策定までの大雑把なスケジュールを記載したものです。なお、お手元に配布してあります新潟ニューステージについては、写真ということで新しい新潟のイメージをふくらませていただきたいということで配布させていただいたものです。13 市町村の合併後のまちづくりについての建設計画については新にいがたまちづくり計画が最新の資料ということですので、参考のため配布をさせていただいております。
　それから政令市になりますとさまざまな権限がございますので、それらの関連事業ということで政令指定都市をめざすという資料を配布させていただいております。説明は以上です。

与田座長
　今ざっとまちづくり戦略会議の資料のご説明は事務局からございましたけれども、現在のご説明をいただきました資料についてご質問があれば、いかがですか。よろしゅうございましょうか。

大川委員
　四次総というのは確か平成 17 年度までだったと思いますけれども、これですと 19 年ですね。穴が空くと言うことは無いと思うんですけれども、どのようにお考えでしょうか。

事務局
　現在の第四次総合計画につきましては、平成 17 年度を目途ということで、基本構想が議決事項ですので、17 年度目途が 18 年までずれ込んでも大きな方向性を示すものですので、すぐなくなるというものではございませんが、基本計画、実施計画については大川委員がおっしゃるようになくなるという懸念がございますので、基本計画については延長させていただきますし、実施計画については合併建設計画を踏まえまして第四次実施計画ということで、17、18 年の計画を埋めるということになりますので、総合計画については基本的には空白期間は生じないという形で、新しい総合計画を 19 年度からスタートさせたいとい

うことです。

与田座長

よろしゅうございましょうか。ほかにご質問ございますでしょうか。ございませんか。

まず、このまちづくり戦略会議がスタートしましたので、先ほどの市長のご挨拶にもありましたように、この街をどういうふうに考えるか、どうやって持っていくか、今回はまず第１回目でございますので、将来像、もしくは今現状の新潟のイメージ、それに対して皆さんのお考えをお聞きしておきたいなと思います。将来像をどういうふうにするか、あるいはどういうふうに考えていったらいいか、それぞれのお立場もございますし、それぞれの今までやってこられたご自身の中から、いやこういう新潟市がいいね、あるいは新潟市のこの部分はこう変えるべきだねということがたくさんあると思いますが、それについてまずお１人ずつ順番にご意見をお聞きします。今のお話をお聞きになった上でこれからの新潟に対して期待されること、ご自分としてはこういう点をやってほしいと思われること、ご自分の分野から見られてこのあたりはこうしてほしいね、こういう新潟市であってほしいねというあたりをご意見を賜ればと思います。

横山委員

こういう席は初めてでございますので、市長がいらっしゃるのでまず最初に基本方針を明らかにしてほしい。それは量的に、質的に。量的な問題は資料の２ページ以降書いてありますので、これを踏まえて、この項目が、この項目だけでも十分なんですけれども、項目は検討する、それから質的に何を目指すということを明らかにしておく。

そして２番目には取り上げている事項を検討をし直すということ。この中で私が気になりましたのは、新潟市は安全なのかもしれませんけれども、防犯等の問題もあろうかと思います。これは例えば検挙率がどうだとか、外国人犯罪がどうだとか、そういうふうな問題等がありますので、それらについても考えてもらいたい。

そして計画の年次ですけれども、これは７ページ以降に書いてありますが、これまでにすればいいんですね。それからこれはレポートをまとめるのではないのだと。この委員会の一応の提案みたいなものは最終的にはまとめるわけですね。

与田座長

私は最終的にはまとまらなくてもいいと思います。まとまらないと思うんですよ。この段階でいいますと。だから方向性が出ればいいと。だからつまり、全く違う意見が対立している場合、あえて一緒にしようと思いませんで、並列で出しますから、議事録は残しておるので、ただしこれを提言としてまとめるという形にはならないと思っております。

僕らは素材を提供するだけですので、横山先生と伊藤先生が全く違う意見を言っても、そのまま出ていきます。ただどちらを採るかはこれからの議論によります。

横山委員
　それだったらいいんです。たくさんの審議会があって、ほとんどの審議会は提案を書く人が事務局とか、

与田座長
　決まっていますね。

横山委員
　我々はどういう審議会方式でまとめていくか、原案を誰がまとめていくか、それを最初に考えておかなければだめじゃないかと思います。

与田座長
　原案につきましては最終的には我々のものがレポートになるということはまずないと思います。先行き出てくるこの四次総ですとか五次総か、それとも新しい政令市の新しい計画、この中に我々の意見が盛り込まれていればよろしいのでありまして、これをむりやりまとめて１つの提言として市に出すことは考えておりませんし、そういう役割の会ではないと思います。
　ですからそういう意味では自由に活発にご意見を出していただければよろしいのでありまして、どこかの審議会みたいにアリバイづくりをやっているということはけっこう行政の審議会は多いのでありますが、これはそういうことはない。全く彼らもフリーハンドでございますから、これから彼らが考えていく、事務局サイドが考えていくものに対して僕らはどんどん提案をしていく。それをネタにしてあの人たちが考えていく。それをまたできたものに対してはチェックはまちづくり戦略会議の次の人たちがもう１回チェックをしていくという格好になりますから、ご心配することはないと思います。

伊藤委員
　きょうは総合的なところでございまして、どういう考え方に立っていくかということですが、きょうお話をお聞きしまして大枠の議論として何を考えていくかというと、ここにあります田園と港町が恋をして、結婚して、新婚生活をして、やっぱりハッピーな暮らしというものがなければならない。ハッピーだねという指標は一体何があるんだろうかという、今事務局のほうから関係の政令指定都市との比較でわが地域はこのあたりの位置づけになりそうですよという説明をいただきました。
　それでひところ全国でくらしの満足度でしたかね、あの指標でいいのかどうかわかりませんけれども、私たちが今まで 13 市町村で歩いてきた歩き方はそれぞれ個性も現実性もある。そこでこれから新婚生活を送るにあたってどういう暮らし方をすればいいかというと

ころのすり合せというのが、この建設計画というところにおおよそはあるんでしょうけれども、これがある意味では家は何坪が良いねとか、下水道はどこから引いてくるかというものであって、私の気持というものは、こういうものはまだこれからなんだろうと思っているんですね。暮らし方というかね。

この指標づくりというと、満足度なり暮らし方というのはどうしたらいいかというのがおそらくここでのソフトとなるかもしれませんけれども、考えていくべき課題だなというふうに思っております。

今回、田園型という田園性を持った政令指定都市というのを打ち出しておられるということでも、私農学部という立場からしますと大変ありがたいお話でもあるんですけれども、ただそうすんなりといく話でもないのかもしれません。ただ田園性を持ったということはどういうことなのかというと、これからがむしゃらに工業生産性を上げていこうとか、さいたま市を追いかけ、横浜市を追いかけていくというそういうふうなレベルの話ではないわけですね。ただ予言としてこういうものが生まれるという、その中での田園性というものは暮らし方としてのバックグラウンドというか立地関係といいましょうか、そういうものとして大切にしていきたい指標だろうと思うんですね。

その場合に、町と村の回廊といいましょうか、食の回廊とか農業の回廊、あるいは緑とかさまざまな暮らし方の回廊、安全の回廊とか環境としての回廊、さまざまあるだろうと思いますが、その回廊というものをどういうふうにして通せるかということが課題になっていくのかな。

その回廊の中に田園性というものを踏まえて、品位があったりほかの政令指定都市にはない新潟らしい豊かさというんでしょうか、を求めていく、これをみんなで考えていくのかなと思うんですね。

与田座長

今おっしゃる都市と田園の回廊というお話ですけれども、その場合おっしゃっている意味はソフト的なものですか、それともハード的なものを含んでという意味ですか。

伊藤委員

両方かもしれませんね。町の側から見ると足りないものもあるし、逆にどなたかおっしゃったように月潟村とか中之口村とかから新潟地域を、全くこれは逆に福島潟から見ていますけれども、中之口あたりから見ると新潟市ははるかに遠いかもしれませんね。しかし１つの地域なんですが、その人たちはどういうふうにあるのかなというところが、回廊があったかい回廊なのか、冷たい回廊なのかわかりませんけれども、そのスタンスみたいなものがこれから、

与田座長
　例えば地産・地消とかいうものも含めながらのいわゆる回廊という意味ですね。

伊藤委員
　もっとにぎわい空間をそっちもつくってあげるべきではないかと思うんですね。

与田座長
　月潟村は私よく話をするんですけれども、角兵衛獅子で大道芸人フェスティバルとストリートパフォーマンスをやるとけっこう２万人ぐらい来るんですよ。そういうものを逆に持っているところもあるんですね。昔からの文化というものを大事にしている。そういうものもさっきおっしゃった田園の中に入ってくるような気がしますよね。

平沢委員
　今、お２人のお話を聞きますと本当に私も同じようになるんじゃないかと思いますけど、安全な家庭生活、子供を産み育てて大きくして、職業について、家族の面倒を見て、自分の終焉に責任を持つという一生涯のことを考えますと、これからのもう待ったなしまでに地球を傷めてしまった現在では、自然と共存できる暮らしを考えていかなければいけないと思いますし、またこれからの産業を起こしていただきたいときも自然に逆らう、負荷をいっぱい与えるのは私どもとしては支援できないという気がします。
　この前も私は２回ほども、市長との会議に出させてもらいました。そのためにいろいろなところを少し見て回ったんですけれども、豊栄にしても白根にしても新津にしてもそれぞれ立派なハードがいっぱいできていて、これを私たちはほとんど見ていないのに気がついて、例えば白根市の凧の飾ってあるところは 2 度目なんだけれども、１回目とは全然違う感動を得ました。
　それぞれの地域でこれだけの伝統を大切にしている、時間とお金をかけているものがある。あとはここにおらが街となったときに、自分の小さいときを思い出すと大体自分の置かれている街は、山でもどこに清水があって、大体どれぐらいまでは何年生のころはおっかなくなくなって行ける、大体縄張りもあったのでしげく行っている。それと同じように今は乗り物があるわけですから、新市になったところ、隅々まで人々が行き交う、今度はそこに排気ガスを出しながら行くんじゃなくて、自分の足で、あるいは自力で、あるいは非常に効率のいい自然を犯さない乗り物でそこに行くような、市民が行き交う街にしなければいけない。
　それは最終的には私は、この前集ったときにはまだそれぞれに発達した市町村が合併するのは大変難しいと思いました。やはり何かというと連帯力みたいなものをどうしたら培っていけるか、それに大いに心する必要があるんじゃないかという気がしました。
　といいますのはこの街に限らず日本中がそうですけれども、非常に戦後急にお金持ちに

なった。経済が豊かになった。それと一緒に個人の自由も得た。私も全然気がつかなかったんですけれども、忍び寄ってきたのは個人の孤立化といいましょうか、何とも人間関係の希薄化といいましょうか、そういうものが今毎日のようにニュースでわっと思うほどの恐ろしい事件を起こしている背景があると思うんですね。

この田園都市になって豊かで、そして農業、私は農業立県であり農業都市であるのに、農山村を痛めつけてきた都市市民の１人だと思っております。その贖罪としてももっと農村に寄り添って、連帯感のある新潟市を、例えばお祭りをきっかけに、あるいは市民の交流をきっかけに、小さな子供から、例えば私はこの中ではもっとも高齢者の１人だと思うんですけど、新しい市ができても高齢者の責任はまだまだいっぱいあると思っています。

例えば 60 歳までは私も髪を振り乱して、職場に働かなければいけなかったですけど、気がついてみると子供に生活技術をほとんど教えている暇がなかった。教育に関しても高齢者が改めてこの新市の歴史を十分に勉強した上で、孫の代の子供たちにそれを伝えるという重い責任が高齢者にもあるように感じました。

与田座長

議論としましては横山さんもおっしゃったように、安全というのがまず１つありますね。その辺がなかなか出てくるには、もちろん安全にはいわゆる防犯の問題もありますけれども、食の安全とかみんなかかわってきますけれども、安全というキーワードはなかなか入れにくいものですから、この辺斟酌して。

あとこれから我々いろんな産業を誘致してこないと社会増が生まれていかない。今この 1.29 の合計特殊出生率の中では人口が増えなければ我々商売できませんので社会増を増やす。そうすると産業を張り付けるとかなりますけれども、今おっしゃったように負荷のかけない産業、自然に負荷のかけない産業をどういうふうに持ってくるか。そのためにはかなり優遇措置をやらないと、今までみたいに、団地造りました。はい、来てくださいでは絶対来ない。来ても我々の望む人は来ませんので、そういういい産業にきてもらうためには、税制を優遇するとかいろんな政策はいるでしょう。そういう恣意的なことをやっていかないと自分たちの望む産業というのはついていかないなという気がしております。

及川委員

新潟は田園都市型政令都市というわけですが、やはり農業面積が日本一、いわば農業都市であり、農地を持っているというのを最大に生かすべきだろうと。何も田んぼが多いから、緑が多いから田園都市だというのではなく、この「農業」というか、そのような特色を生かすことが重要です。やはり「バイオ」ということでバイオリサーチとバイオマスということがありますけれども、そういうもっとも特色を生かした新しい環境保全型農業とバイオ・フードを基本とした産業を、進めていくということだと考えております。

北九州市が、「リサイクル」というものをキーワードにした循環型都市というもので、そ

こに活路を見出し北九州市は非常に活気づいています。

それからもう１つは、安全というキーワードがあります。私は厚生労働省の研究班で「地域における健康危機管理」という研究班に加わらしていただいておりました。例えばＳＡＲＳ、病原性大腸菌Ｏ－157、鳥インフルエンザとか、あるいはサリン事件とかありましたが、どうやって安全な地域づくりのための危機管理体制をつくればいいかを検討する研究班でした。

「食の安全」、「生活の安全」という意味では、やはり環日本海というか対－外国も視野に入れた体制づくりが必要でありますし、新潟には新潟空港が、また港もあります。そういう意味でバイオテロや健康に関する危機管理ということが重要です。アルカイダは新潟に隠れていたということもありますけれども、そういう意味でのやはり新潟としてしっかりした危機管理体制を持つべきではないのかというようなことを思っています。

与田座長

同じように危機管理、もちろんバイオということでありますけれども、やっぱり田園都市というものをどういうふうに実現していくかというのは、やはりこれから非常に難しいといいますか、議論の多い、あるいは楽しみな部分だと思います。それはやっぱりこの会議の後半の部分では、田園型政令指定都市といっているのは、じゃあ何か、中身は、施策は、このあたりに、ことしの後半ぐらいまでにそちらの方の施策がでてくればいいなと思っていますので、ぜひ皆さんもそういうことについての具体的なアイデアがありましたら、この次までに考えてきていただきたいなと思っております。

長谷川委員

私は人にやさしいとか環境にやさしいのではなく、人がやさしい新潟市、新しいやさしい人たちがほしいなというふうにまず思っていて、それはいろんな人に思いを寄せられるような人になるということで、それに田園型政令指定都市というのはとても合っているような気がします。

それとももう１つは、観光交流人口を増やしていきたいと思います。そのためにも今ある田園の美しさを生かした美しい街、できれば人があこがれてここに住みたいと思わせるような新しい魅力を充実していくようなものになってほしいなと思います。

特に交通のことを考えていきたいですね。白根方向から来る人たちがとても不便を強いられているという現状を考えてみても、いろんな人が行き交っていろんなところを歩いてみたくなる、それで住んでいる人も気づかないようなものを新しい宝物を見つけてもらえるようなそんなふうな街になっていったらいいのではないかなと思います。

与田座長

これから新しい、じゃあ何があるのか。今新潟市でいいのがなかなかない。

今度造られましたのが歴史博物館でしたかね。ああいうのができてきましたので、そういうものの中で交流都市、それからコンベンション都市というものをいかにめざしていけるかというのがこれからの課題だと思います。

大浦委員

教育という面から考えますと、市の規模を拡大するというのにプラスの面とマイナスの面があると思うんですね。プラスの面としては１つの市域が大きくなればいろんなところで様々な試みをすることができる。小さいときは１つしかできなかったのが、規模が大きくなったら複数できるという、そういうことがあると思います。

やはり一方でマイナスの面があると思うんです。それは規模が大きくなってみんなに同じようなサービスをしようとするならば、共通部分で括るということになる。そうなるとそれぞれの地域が持っている特色というのが壊れてしまう、そういう危険性があると思います。

もう１つは、例えば学校現場のことで見ますと、学区が広くなってきますので、選ぶことが出来るプラス面もあるんですが、下手をすると格差が大きくなってしまう。そういう面もあるかと思います。その辺によくよく目配りして、広くなった分だけ各地区に目配りをしていくことが必要だと思います。

もう１つは資料を拝見しますと、高齢者、老年が高くて、でも一方で年少の人口比率が高い。高齢者の多いということはその人たちにも学ぶ場を保証していくというのが特に必要だと思います。

そういう生涯学習の場を広い新潟市でどうやってつくっていくか。それから学ぶだけじゃなくて学んだことをどこかで生かしてもらうためにどういうふうなことができるのかを考えていくことが大切だろう。それから年少人口が多いということはめでたいことだが、地域にきちんと根ざした教育をしないと、結局自分の生まれた土地に対して愛着がもてなくなるおそれがある。ただ広い新潟市で育ったというだけでは愛着をもてないのではないかと思います。

与田座長

今のお話の中には１つ出てこなかった分権という問題、分権型というふうに市長は言っておられますけれども、それを教育においてもどういう点で分権なのか、もちろん行政的な分権問題もありますけれども、いわゆる文化的な地域的な分権問題、大浦さんが言っているのはまさにその部分で、地域がどういうふうにめざしている子供たちを育てられるか、いわゆる地域に対する愛情がどこまで続いていくか、そこの地域が魅力ある地域でいられるかという、このあたりのかかわりですから、このあたりをどういうふうに工夫をしたらいいのかというあたりは大浦さんご専門でございますので、これから先の話ですが来年の３月までにいろんなことを考えていただきたいというふうに思います。

分権型というのも非常に問題がある部分があって、まとまりで規模のプラスの部分と規模のマイナスの部分がありますから、どういうふうにお互いに生かしていくんだろう。

私は役割分担というふうに考えればもっともっとわかりやすくなるなと分権を読み替えているんですけれども、やっぱり新潟市だけに芸文があって、横越町はごみ処理場があればいいというこういう発想は絶対うまくいかないですね。やっぱり良いところはちゃんとそういうものを抱える。できればごみ処理場を新潟の下町に持ってくる。そのお湯でもって温泉をわかすみたいなことを考えないと、お互いに役割分担をきちんとやっていかなければ、このときにやっぱり域内役割分担で担うべき点で負荷をかけなければいけないのは新潟市で、いいところも分けてあげればうまくいくという気がしますけれどもね。分権の１つだと。

教育の分権については、ぜひよろしくお願いします。

桜内委員

私が今思いますのは都市計画というものが一体何かということ、あまり専門ではないんですが、交通網が大事だと思います。先ほど長谷川委員からもそういうお話がありましたけれども、交通網をどういうふうなのをつくるかということで、都市の範囲が広がるとすればまとまってくる。これは当然の話ですけれども、そういう意味で今後特に新潟市が広くなっていくときに、交通網は重要な課題だなと思います。

交通といっても２つあると思います。１つは当然合併する町との間の新潟市内との交通をどうするか、それともちろん新潟以外の、例えば海外等も含めたところとの交通をどう結ぶかというのがありますので、内部でいいますと私ちょっと思いますのが、けっこう車で移動する方が多いんですけれども、観光とか考える場合、来た人は当然車を持ってないわけですので、車でないと行けないところが非常に多いので、観光で人を呼ぶということは難しいんじゃないかと思います。

そういう意味では今は大学に通うバスで来るんですが、大学もけっこう端っこにありますので、時間もかかればお金もかかる、そういった意味で、内部的な意味で市内の交通をどういうふうにしていくのか、というのも考えてみたらどうかなと思っています。

そういう意味では新潟駅の中に新幹線を降りてくると、水の都新潟とあるんですけれども、確かに海はあるんですが、あるいは海岸もあるんですけれども、水の都というと普通ベニスとか思い浮かべるんですけれども、川とかせっかくあるのに全然利用していないわけですよね。堀も埋めたてている。水の都というのも何なのか、というふうな思いがあります。

もう１つの海外との交流ですけれども、これは非常に大事だと思っていまして、特に新潟の特色を出すというふうに言えば、日本海側でこれだけ大きい都市は新潟しかありませんので、ぜひ海外とのつながりというのを深めていただきたいというふうに思っています。

パンフレットになりますけれども、姉妹都市は新潟に限らずいろいろたくさんあります

けれども、実効性のある姉妹都市というのはないわけですよね。何かしら市民が遊びに来て何か特典があるとか、全くないですし、あるいは産業の面でもそれに対して新潟市に拠点を持つ企業に投資するときに何かあるかというと何もない。単にパンフレットを市役所に置いてあるというぐらいで、何かしら実際の法的な効力というか、あるいは経済的な意味でも意味のある姉妹都市とか、そういうのを作っていく必要があるんじゃないか。そういうネットワークをつくっていく必要があるんじゃないかというふうに思っています。

それとあともう１つでいえば、分権ということもからむんですけれども、私は分権というのは中央政府との間の分権ということが大きいんじゃないかなと思っています。特に政令指定都市になって何ができるかというのはパンフレットにもありますけれども、見た目ちょっといい方が悪いんですけれども、本当の意味の分権というのは、よく言われますけれども、例えば市の財源ですとか行政の公的な面ですとか、そういうことも含めて高程度の自立性を与えられるべきだと思うんですが。

私はこれまで海外で仕事をすることが多かったのですが、アメリカを含めて印象に残っていますのがマレーシアとシンガポール、シンガポールというのは政令市よりちょっと大きいんですね。人口でいうと 300 万人ぐらいなんですけれども、あれだけの経済発展を遂げているんですね。

何やっているかというと、世界中からの投資を呼び込むために投資税額控除ですとか、財政的なインセンティブを与えるんですね。港をきちんと整備するとか、相当戦略的にやっていると思うんですけれども、新潟というのは相当いい地の利にありながら、港も日本五開港といわれているにもかかわらず、万景峰号で有名な以外はもったいないという気がしています。

ですのでこれから分権というのであれば税制面とか、あるいは外国とのネットワークづくり法的な意味のネットワークづくりとか、より実際に効力のあるものをやっていけばというふうに思っています。

与田座長

ここで出てきた話としましては、桜内委員は担当としての交通網関係の話がありまして、域内と域外、域間の交通、もう１つは、海外、アジア、あるいは国際的な流れ、新しい姉妹都市、そういうふうなことで新しい形での海外との関係をきちっとつくっていきましょう。それがさっき長谷川さんが言われた交流人口にもつながっていく部分があります。

もう１つ一番大きいのは財政的な問題をきちんとやっていく。これはご専門でございますので、これからの議論にたくさん出てくると思いますが、財政的に担保できるものをきちんとやらないといろんな政策を打っていけない。さっきも申し上げたように、新しい産業を呼ぶのでも財政的に支援があれば呼びやすいしと。恣意的に自分達のことができるということになりますので、ぜひこれからの議論で深めていってほしいと思います。

大川委員

先ほどから出ています安全、安心の暮らし。これは市長さんの公約でもあるわけなんですけれど、やはりそれが一番大事なことだと思うわけですけど、その中でほかの分野はあまりよくわかりませんので、医療の立場ですと、これからは保健、医療、福祉というのが大きな柱になるわけですけど、これからはやはり病気を予防するという、そういう意味で市民の自覚、あるいは協力いろいろないとやっていけないと思うんですよね。

とりあえず卑近な例なんですが、最近ははしかが非常に多くなっていまして、それに対する親子の知識があまりない。おじいちゃん、おばあちゃんもあまり知識がない。一方医療側も、はしかの診断能力といいましょうか、そういうものが医師、看護師がかなり落ちていると。極めて卑近な例ですが、そんなこともありますので、全体的にレベルアップといいましょうか、そういうのは必要だと思いますね。

一方、時間外の救急関係についても現在のトップレベルを、先ほどもお話しましたが、なにしろ膨大な面積の都市ですので、この地域的な空間をどのように埋めて合併したほかの市町村の市民の方々にも従来の新潟市民と同等、それ以上のものを提供できるかと、これは審議会の立場では考えると頭が痛くなることですが、深刻な問題で先ほどから問題が出ていますけれども、これも含めて地域的な格差をどうやって埋めたらいい市民生活をみんなで出来るかということを考えている、また悩みの多い問題のような気がします。

与田座長

病気の予防というのを今おっしゃいましたけど、どういう面で、個人でもちろん予防をするわけですけど、都市側、行政側として病気の予防に対してどういうことができるかということはこれから議論して出てまいりましょうか。

大川委員

例えば予防接種の接種率も高くない。あるいは住民検診の検診はあります。意外と受けていない方が多い。知らないのか、関心がないのか、それぞれ理由があるんだと思うんですが、受診率は決して高くない。そんな問題もありますので、

与田座長

そういう意味では先ほどの安全の問題と組み合わさる問題ですよね、病気の予防という、

大川委員

禁煙の問題とか、

与田座長

わかりました。予防関係は老人の希望が高うございますね。さっきのデータを見ても。

西條委員

先ほどから田園型政令指定都市、農業粗生産額１位なんだけれども、製造品出荷額が 11 位だったり、商品販売額が 11 位だったり事業所数が 13 位だったりとか、出荷のほうがすごく少ないんですよね。たぶん農業じゃない部分を抱えているのは、今の新潟市なのかなと。先行き不安なので特に私みたいにこれから教育費とかいろんなものがかかってくる世代は、このままで大丈夫かなという気が正直します。

やっぱりさっき与田座長がおっしゃったみたいに、新しい産業を誘致するわけじゃないんだけれども、お金を稼ぐというのか、やはりお金の面でも裕福になっていかないと、これから先まだまだ若干不安なので。

起業マインドのある人は全部東京に行ってしまってここに残っていないとかということだと思うんです。やっぱりそれではまずいと思うので、さっき与田座長が優遇措置を設けるとかありましたけれども、地元に残って起業する人とか、商店街の活性化と関係することがあるんですけれども、田園都市だけで売っていくだけでは食べていけないかなと。

与田座長

食えない。

西條委員

いいところを生かすけれども、やはり実入りを増やしていくものを考えていくのもあるのかなと思います。

もう１点なんですけれども、私も子供が小さくて、今はよくなったんですけれども、はじめ新潟市の助成制度はあんまりよくなくて、他の自治体の方が上でした。実際に合併する際には、どこに基準を合わせるかというのが問題だと思います。

与田座長

医療関係についてはやっぱり大川先生と一緒ですけれども、これからは救急医療に力を入れていくべきなのか、単に予防医療の問題なのか、助成金の問題とどちらをとるのか、税金のシステムはこの時期難しいと思いますよ。その辺をどういうところにもっていくかというのは、今度は医療関係の問題についていうと、いろいろ専門家に集ってもらいながら、どこでどんなふうに切っていくのか。我々の財政に対して。これはやっていく、議論しなければだめですね。全部今が一番いいというのは難しいかもしれないってのは一つあります。

もう１つは、お金をかせぐ街というのは商工会議所の問題でもありますけど、まず人口がないとお金がないでしょうから、基本的にいうと。その一番の手段が政令都市だと思っているんですけど、仙台の例で申し上げれば政令市になってどんと増えました。そんなふ

うに産業なり学校なり誘致することによって、街に人がこないと、商売ができるのは人口ベースでございますので。教育もそうなんですけれども、教育はかえって少ないほうがやりやすいかもしれないんですが、商売はロビンソンクルーソーではできないわけで、そのあたりが一番、財政とのかかわりがどうやってやるかと。お金を稼ぐ段取りよろしくお願いします。

大熊委員

まず先ほどから、平沢さんからも子供が生活技術をしらないとか、今も大川先生から確か発疹が治らないというような話が出ていたと思うんですけれども、年寄りの知恵をどう子供に伝えていくのかということはやはり大きなテーマでないかなと思い、私は世代継承性という言葉でそれを考えているんです。

英語ではジェネラティビティというらしいです。今私がやっている NPO 法人の新潟水辺の会でも、例えば船を漕げる技術をどう若者に伝えていくかということを今やり始めているんです。そういう観点が１つ大事だろうと思います。

きのうも梅を採りにかかわったのですけれども、梅干の漬け方を知らない子供がたくさんいる。そういうものをどう伝えていくのか。やはり学校や市役所ではだめなんで、やはり NPO がひとつ重要になってくるだろうと思いますけれども、NPO をどう活用していくのか。単に行政のやれないところの穴埋めということではなくて、新潟市だとか新潟県が NPO とどう向き合ってやっていくのか。正直、今までいろいろ NPO 活動をやっていましたけれども、必ず壁にぶち当たるんですね。この壁は何なのかというと、正直行政の人が NPO の扱いをまだ十分考えていない、方向が定まっていないということがあるんだろうと思います。

ということでぜひ NPO 活動をどう考えるのか。先ほどのいろいろな指標がありましたけれども、この中にやっぱり NPO の数がどれくらいあるかとか、NPO にどれぐらい支援の補助金を出しているとか。そういうことも他の市と比較して、ここに挙げてほしいというように思います。

それが挙がってきてないところに今の問題があると考えます。

それと今回の萬代橋の欄干の高さの議論をとおして非常に感じたんですけれども、中央で決めた技術指針に、基本的に従わなければいけないという構造になっています。これから政令都市になると少し変わってくるかもしれませんけれども、やはり行政にいる技術者の皆さんがもっと単に国の基準だということではなくて、この街にとってどういう技術が一番いいのかということを考えていってほしいと思います。そういう意味で私が最近『技術にも自治がある』という本を書いたんですけれども、そういう観点でまちづくり、都市づくりをやっていってほしいなということを感じています。

工学部にいる人間ですから、すぐ具体的な話になりますが、田園型政令指定都市みたいなことで、佐潟がラムサール登録したあと、次がないわけで、やはり鳥屋野潟、福島潟を

一貫してラムサール登録にすることによって、大きくものの見方、考え方が変わっていくだろうと思いますので、ぜひそれをやってほしいと思います。

次に、やはり堀が復活することが大切だと思います。私先ほど歴史を尊重しようということを言いましたけれども、これも象徴的なことで、それを復活することによっていろんな意識も変わってくるだろう。ぜひ新潟市の中に河川課とか海岸課とか、そういう課もつくってほしいと。すでに公園水辺課があっていろいろやっておられるんですけれども、若干趣旨が違うのかなと思いますので。

与田座長

NPO については今おっしゃったように、ある程度そういう役割りもこれから徹底していかなければいかんなというふうに思っておりますので、データがあれば。

ただ NPO もこれまでいろんなことがありまして、いい NPO と悪い NPO とあるわけでございまして、あんまり NPO が出てくると会社が出るところがなくなる。本当に僕は NPO もお金がいると思うんです。ちゃんと金を回さないと NPO は成り立っていきませんから、その仕組みを考えるとあんまり NPO、NPO ばかり言っていると本当のノンプロフィットでは回らないはずですから、もし回らなくなったら行政から補助金をもらってくるというのであると NPO の趣旨とは違ってくる。きちんともうかって、きちんと回せる。それを利益を出さずに投資しているのが NPO だと思っているので、そういう点で NPO のあり方については市としてはきちんとした規定も、あるいは考え方も出していくべきだと思っています。

今おっしゃった行政のいろんな施策の独立、これは地方分権一括法ができて国の機関委任事務がなくなってきましたから、もう地方でやるほかないわけですね。いろんなことを。道路が６メーターだよと国土交通省で決めてきた。今度は自分たちで何メーターとやっていかなければならない。そういうことをやっていく時期に政令市になったらなってきますから、そういうことをきちんとできる街になっていくということは必要なので、そのためには勉強してもらって、行政の政策立案能力をきちっとつけてもらわなければいかんということを、我々の要望としてはいく必要があると思っております。

それは財政の裏付けというのがありますから、さっき桜内先生がおっしゃったように、税金をどうやって取っていくのか、どういう収入を得ていくのか、そういうことも考えていく。東京都の石原都知事の外形標準課税ではありませんけど、そこまで考えていく必要があるんではないかということも１つあると思います。

まず水の問題ですね。水の問題につきましてはさっき河川課という話が出ましたけれども、例えばウオーターフロントオーソリティみたいな考え方を、ちょうどポートオーソリィティがサンフランシスコにあって、あそこのフッシャーマンズワープもやっていますけれども、ウオーターフロントオーソリティみたいなものが、行政というよりも民間と合体でできていくことによって、ある程度権限が出ますね。ウオーターフロントというと河川

も入りますし海岸も入りますから、こういうオーソリティの考え方というのを外国から多少輸入されたらどうかなと思っています。

こういう点でいろんな議論が出てくるだろうと思っていますので、ぜひお考えをいただければと思います。

熊谷委員

先ほど冒頭でもご挨拶を申し上げましたけれども、先週新潟へ来たばかりです。新潟の実情とかいう知識も持ち合わせていないんですが、幸い 20 年以上前になりますが、新潟を出てから 20 年たちますので、久しぶりにまいりました。

今回政令都市、要するに合併をして大きくなって、その余勢をかって政令市まで駆け上るという、大構想に立ち会うということに興味を持ってやっているんですが、これから大きくなった政令都市、大きくなった都市が何ができるか。強制的な意味で政令都市になると今までできなかったような、中央からの呪縛を解かれて自分の頭で考えていろいろ構想していけるんだから、いろんな知恵を出しましょうというのがこの会の趣旨なんだと思うんだけれども、ただいま 50 万いる新潟市においても、いろいろな街、住みやすかったとか、産業だとかとかいうことも日夜構想して、できている中で、全国的に景気が今ひとつの中でいろいろ苦労されている。

これが 80 万近い人口を抱えたからといって一挙に全部解決するのかというと、そんなことはありえないだろうと。今までの延長線でできなかったことが、例えばシステムとしてできなかったことが許されて、そこの蛇口が開いたのでちょっと動きがよくなったというようなことではあるまいかということですので、今座長がおっしゃったように、実際このパンフレットの中にもこんなことができますと書いてあるんですが、実際何ができて、しかもそれが新潟市の実情において何が有効なのかということを少し勉強しなきゃいけないなというふうに思います。

新潟に赴任してきてからまだ１週間にもならないんですけれども、昼間の街とか夜の街とかだいぶ回りましたけれども、印象としてもともと新潟というもののイメージというのは豊かで、江戸時代からたくさんの人を養ってきていた。この新潟平野で。実は所得の指標なんかにあらわれない豊かさというのを持ち合わせているんだと。一見を比較するとあまり目立たないけれども、実は市民はみんな豊かな暮らしをしているという実感を 20 年前も持っているということで、そういう豊かさを引継いで拡大していく方向というのは重要だと思います。

しかしそれは何に起因するかということをきちっと分析するべきであって、我々印象として、新潟は豊かなんだよねというのは大体の人が異論をはさまない。私は仙台人でございますけれども、仙台もいいところですねといわれる。私も異論をはさみませんけれども、具体的に何がいいのかというと、けやき並木がいいんだというだけで、あと何を言おうかなと。引っ越しの際に萬代橋をわたってこちらへくるところのけやき並木に驚いて、柳じ

ゃないのよね。仙台みたいになったねとこういう会話がでました。別に柳にこだわる必要もなくて、けやきがいいと思えばけやきでもいいわけですので、要するにきちっと現状というか、を見てやるというのが大事かなと。これは方法論でございます。

それからよい暮らしという、豊かな暮らしを進めていくというのは、ものが豊かなだけじゃなくて、先ほどご発言がありましたけれども、やっぱり新潟の人というのは仙台の人間に比べると非常にやさしいですね。物腰も、言葉もやさしいし、そういういい文化を守っていくと。

それから新潟にしては変な事件が起きて、安全な街とは言いにくくなってきておりますね。しかし、もともと私の印象では新潟というのはあんまり犯罪もなく、夜中にどんなに泥酔して寝ていても踏みつけられた覚えがないということですので、安全でいい街というものをつくっていく。

それから人の心だけじゃなくて、都市構造としても安全でいい街をつくっていくというのは大事かなと。ですから新潟として非常にいい街というのは、心もそれから都市の構造としてもいい街というのを目指していくというのが大事なことなんだろうなと。ちょっと総論めきますけれども。

ただそれに田園都市という言葉の中で表現するとなおさら美しくてイメージの高まるものを感じるんですけど、それはしかし産業がなくちゃどうにもならない。雇用がなくちゃどうにもならない。住みやすい街、非常にいい街、人柄もよくて文化的でいい街なんだけど、定住できないとどうしようもないんですね。結局職を得るために東京へ行くというような構造とか、地元に就職したいけれども若年雇用がないとか、これは全国的に若年雇用がないというのは問題になっていますけれども、その雇用をどうやって生み出すのかと。

それは田園型都市構想、田園型というキャッチフレーズと共存するような産業群をどこかで見つけていかなければだめなんだろうと。地産地消の話も先ほど委員長から出ましたけれども、そういって田園都市と共存する産業の拡大と雇用の場の提供と、というのをどこかで持っていかなければならないなというふうに思っております。

最後に１点だけですが、なつかしい古町を訪れてみて非常にがっかりしているのは、古町の下のほうは非常に 20 年前はいいところだと。ちょっと裏手には焼け残った古い料亭があっていいなと思っていたんですが、表通りはちょっと歩くに耐えられない状態になっていたので驚いていました。

一方で万代シティのほうへ行くと若い人なりの暮らしをしていますから、あれは東京から見ても普通なんで、あの古町は万代シティがよくなるのはいいんだけれども、取って代わられて古町が何なんだと。

先ほど桜内さんがおっしゃったように分権という言葉の中には地方と中央の分権もあるし、域内の役割り分担みたいな分権もあると思うんですが、役割り分担をした上に古町と万代シティみたいな関係になるのは、要するにどこかがすごく栄えて、片方はすごくだめになってしまう。だめというか嫌な街になっちゃうというのは、これは分権ではない。こ

ういうものでなく、ただ富はみんなに平等にやると薄っぺらくなりますので、集中と選択というのはどこかでいるので、集中と選択をしていてもあんまり片方が片方の犠牲になってしまうものではない分権を目指すべきではないかなと思っております。全部総論ばかりで、よろしくお願いします。

与田座長

今おっしゃった中でいえば、枠組みが変わるだけなんで我々が努力しなければ何も変わらないよというのが第一のポイントですね。市にしても市民にしても政令市になったから我々よくなるかというと全然よくならないから、ただ変わるだけですから。中身が変わらないと枠組みだけ変わってもよくならないという。これは一番ポイントだと思います。

あと田園とうまく融合した新しい文化、やさしい文化というキーワードはすごいいい話であるわけですけれども、ただ田園と雇用の場というのは及川さんの出番でございまして、バイオなんてのは、これからの一番主役になっていくと思いますので、ぜひ。それとさっき桜内さんもおっしゃった今度アジアとの関係の交流人口、この辺も大きな問題です。

ただ熊谷さんはずっと新潟を離れておりましたので、今古町以外はけっこう新潟を褒めていますけれども、外から見た新潟のイメージというのがどうでしたか。他人として。ぱっと新潟と聞いて何をイメージしましたか。

熊谷委員

新潟の印象を外で、実は新潟に関わりのあるものとしてしゃべるときに、杉の木と男の子は育たないということでよく言われているんですよ。風の強いところでね。男の子はどうして育たないんですか。うーん、お母さんが怖いからじゃないからですか。お母さんが働き者で外で出るとかいろいろ言われていますよというような話ですが、これは印象で、これは逆に裏返すと男性も女性もみんなやさしいんですよね。ガリガリと一番を勝ち取ろうという人がどうも新潟の中ではいないんですね。一番を勝ち取ろうとすると「競争するなや」とこういうふうに言われると。というような感じがしますね。

出たいという方は外に出て活躍されるというような印象を持っておりまして、今の話は総括すると、やさしくて非常にいい土地柄なんだけど、そこそこに暮らしていると。魚もおいしくて、酒もうまくて、美人も多くて、コメもいっぱい採れて、何も困らない。所得番付ではたいしたところにいなくても非常にみんな豊かに暮らしているから、隣とは競争も喧嘩もしないようにすると。競争して１番になりたい人はそうすればいい。そういう街なんだなという印象を持ちました。

与田座長

転勤の人から見ると食がいいんですよね。酒もおいしい、コメもおいしい、魚もおいしいといわれますから、そこが売りなんでしょうね。

熊谷委員

もちろん。ですから外から来た人間は住みたいし、ショートタイムで遊びに来たいところだし、と思うんですね。逆に私の生まれた仙台というところは、よそ者は住みたくない街だと思います。ちょっと本当に自分が住む目に合わない人が美しい街だといって最近褒めてくれるだけで、本当はあそこへ行くとよその人に非常に失礼な言葉遣いを使ったり、つんつんしたり、そういう人間性は新潟へ来ると。

与田座長

市長、ここで何かご自分でお聞きになりたい、この辺について皆さんに聞いてみたいというのがありましたら、何かありますか。

篠田市長

いろんなところで市民の方にお話はしていますけれども、簡単に新潟の目指す方向をお話ししたい。

我々合併・政令市はあくまでも手段なんだと。肝に銘じなければとお互いいいあっているわけですけれども、じゃあ目標は何なんだということで、最終的に市民の満足度を新潟で暮らして住んで、そして最後は死んでいってよかったということを言っていただける市民のパーセンテージ、これを増やしていくことなんだろうと。じゃあ市民の満足度を上げるためにはどういうことを必要かと。

１つは今お話の出たやっぱり雇用の場という。雇用の場をつくり出して活性化していかないと、やっぱり生きていかなければならないですからこれが基本にあるでしょう。

もう１つは、これから自分たちの街は自分たちでつくっていくんだという、そういう自己実現の場として新潟という街を使っていただけるかどうか、これがこれからの市民性を考えると重要だろう。

そうすると我々地方主権の流れを先取りして政令市になるんだと。そしてこの政令市で手にした権限と財源を、役所が持っていたってどうしようもないわけで、それを市民の皆様にまさに権限委譲して、できるだけ市民、ＮＰＯ、ボランティア、民間企業の力をもってそれを使っていただいて、それを自分たちでまちづくりをやっているという実感を上げることがやっぱり満足度を上げるという部分につながるだろう。そしてそれと同時に合併をして行財政効率をして効率化をやって、これから非常に厳しい財政の時代に入ると思いますけれども、必要な市民サービス、これに向けていくお金、これを何とか行財政効率化で生み出していく必要があるのではないか。

大きくいえばこういうあたりが今回合併・政令市をやる意味なんだろうというふうに思っています。

あと分権型政令市という、これを実現するにはどうするかということで、今とりあえず

は 12 市町村が全部支所になりますので、その支所にどれだけの権限、あるいは地域振興費というものをつけようと思いますけど、一部自主財源を、これを今話し合いの中でこれぐらいは支所にやってもらいますよ。これが将来的に区役所の権限、財源につながりますので、そういうことをこれから 13 市町村長が話をして決めていくという段階になります。

我々はできるだけ多くの権限、そして一部自主財源、一定の人事権、これを将来的に区長に付与しましょうと。そういう中で区長がこの区のこと、ほとんど責任を持てるというような体制にしていきたいというふうに思っているわけですが、それだけでは分権型政令市はできないと。この区長がもらった権限、財源など駆使してどう地域の方と一緒にまちづくりを進めていくかと。

そこで今先ほどお話した地域自治区、この考え方を私は個人的には、少なくとも区役所になったら入れるべきだろうと。その前に準備期間、予行演習も必要でしょうから、若干早めに入れるべきではないかなと個人的には思っています。

もう合併と同時に入れようという意見も当然あるでしょうから、それとどういう形で、どういう時期から入れるかというのをこれから進めて、区長がいてそのパートナーとして自治協議会の会長がいると。

自治協議会のメンバーはどういう人が入るのかということですけれども、自治協議会のもとに私は今の新潟市の小学校区がいいと思うんですが、小学校区にコミュニティ協議会というようなものをつくっていただいて、これは任意の組織になると思いますが、コミュニティ協議会で地域の、例えば小学校のこと、地域福祉のこと、それからまちづくりのこと、それらの優先順位を決めて、できるだけコミュニティ協議会の中でいろんなことを協議して、地域の中にある施設の維持、管理、運営、地域でできるレベルの施設は地域でやる。ちょっと地域で手に負えないのは民間の企業とか、あるいは専門のＮＰＯとか、そういう人が管理、運営をやっていくと。それによって使い勝手をよくしてもらいたいし、一方では行政でいえばコスト削減ということでぜひやってほしい。

コミュニティ協議会の主な方が地域の自治協議会のメンバーになっていくという、そこに多少専門性のある方も区の自治区には入っていかなければなりません。そんな形で地域自治区をつくって、地域自治区が区長のカウンターパートナーとしてやっていくと。その仕組みをどうすれば一番機能的で、しかも自分たちの街は自分たちでつくるという感じになるのかどうか。

コミュニティの強さを引き出すにはやっぱり何としてもコミュニティの核は昔は小学校だったので、小学校を有効に活用しよう。でも今の文科省、あるいは県教委のいうことを聞いていたのではできないかもしれない。じゃあ我々は新しい政令市を視野に入れた教育ビジョンをつくろうということで、これも教育ビジョンを来年度までつくりましょうと。ただ教育ビジョン、教育界だけで考えないでくださいね。

例えばこのまちづくり戦略会議なんかと合同会議みたいなものも私はいいんじゃないかと思うんですが、そういう中でやっぱり地域の人づくり、これが非常にコミュニティにと

っては大きな関心事だという地域福祉ですね、なんといっても。教育と福祉が両輪で、具体的なテーマでまちづくり、細かい保守も含めた地域の環境整備、これをやっていただこうと。それをみんな持ち寄って地域自治区、ここで我々行政区はこういう課題がある、あるいはこのコミュニティでこんないいことをやっているから皆でやりましょうというようなことを地域自治区で大いに論議してもらいたい。

田園型政令市のほうは１つの土台と３つの切り口ということを言っているんですが、１つの土台というのは交通であると。いかにそれぞれのまちなかからまずは新潟市の中心部へスムーズに移動できるか。このときに一番大事なのは申し訳ないけど大外環状ではないと。一番最初に効果が出るのは高速道を首都高のように利用することだ。

例えば白根方向からでも黒埼パーキングエリアにＥＴＣ専用インターができれば、８号からすぐそっちへ乗っているんですよね。あるいは高速バスをフルに利用していただければ、今の鳥原のバス停みたいな形でパーキングエリアが利用できると。そうなると相当の、パークアンドバスライドでいいと思うんですが、そういう形でやると国道 8 号の車流入は相当早めに高速道へ乗っけられるんじゃないか。

当然豊栄方面から来るのも、日東道ががらがらにしているよりは、日東道に乗っていただいて、そして自分の都合のいいＥＴＣ専用インターから降りられるということになれば、今よりはるかに日東道の利用が増えるんじゃないか。今のところ 5 つ専用のものをお願いしようと思っていますが、これはフル企画をやるより 10 分の１ぐらいでできますから、これがまず一番手っ取り早い。それをやって 10 年後にこの大外ができていると、今度地域のそれぞれのまちなかから地域のそれぞれのまちなかへ移動するというとこまで熟度が高まってくる。そのときに大外環状が大きな役割を果たすと。

それまでは今言った高速道とＪＲ在来線、駅をもっと大新潟市になれば今まで駅が造れなかったところが造れる。そこにまたパークアンドバスライドをやってもらえれば、既存の社会資本をフルに使い切るというのが、とりあえず第 1 期の政令市では一番交通対策になるだろうと。

それをどういう形でやるかというのも、またこれもまちづくり戦略会議でもぜひご論議いただきたいと思っています。

そして３つの切り口というのは、１つは互恵型といっているんですけど、農業者と消費者が互いに恵み合う互恵型の関係を作らなければだめだと。農業者は 78 万都市がありますから銭がとれる農業になりましたねというものにする、あるいは農業を使ったにぎわい空間ができたんだよ。そこで直接自分たちが作ったものが売れるようになったということで消費者ニーズも的確に把握できるし、自分の作ったものの評価もいただけるというあたりを踏まえていきたい。当然地産地消もそこに入ってくる。

生活者は農業、水田の持つ多面的機能を享受するという仕掛け、これをつくっていくのと、なんといっても安心、安全で新鮮な食材を使った料理がいい環境で割りと安い値段で楽しめるという農業レストランみたいなものが点在している。こういうところに住んでよ

かったねと思っていけるそういう仕掛け、仕組みをどんどん１つでも多く作ってくださいと。これは農業者だけでは絶対できないので、生活者、消費者、商売人、この人たちに大いに知恵を出してもらったほうがいいんじゃないか。

それから 2 つ目は、当たり前の話ですが、これは環境重視と。安心、安全な食材でくるのだから環境重視をしなくてはだめだ。しかも新潟は信濃川、阿賀野川の最下流に位置しているんだから、流域連携までやらなければだめだ。将来は阿賀野川ブランド、信濃川ブランドという、阿賀野川沿いで採れた野菜おいしいですよと。阿賀野川の水産物もそうだと。そういう里の立場で付加価値がつく。

まずは阿賀野川のほうが可能性が先だと思いますけど、将来は信濃川まで信濃川ブランドにしたいと。千曲川ブランドみたいなのが千曲、信濃全域にいくというようなとこまで環境を大切にする地域なんだというイメージをつくって、それがまた付加価値を生むと。あるいは交流人口を生むというようなことをやれないかなと。

３番目は、資源循環。これは環境ビジネスにつながる話で、地産地消も本当は循環型なのかもしれません。その３つの切り口を、今は言っているだけだけれども、具体的にどうすればいいんだというのをみんなで考えましょうということで呼びかけていこうということです。

与田座長

我々が言い足りなかった分でいうと、分権型の部分がわからないし、もう１つは地域自治組織というのも聞いても皆さんわからない。逆にいうと我々としてはそういうものをどれだけの権限を与えていくべきかという議論もできるわけ。あんまり与えすぎると合併した意味がなかったなという話になります。このあたりのバランス感覚が非常に難しいと思うんですよ。あんまり与えすぎると最後におれ独立するとなったらどうにもならない。それからこのあたりを市長のお考えを聞いた上でもって、我々としてはいろんな資料を送ってもらって、これを見させていただいて勉強した上で、次回からの議論につなげたい。きょうは入口で、皆さんフラストレーションが残っているかもしれませんけれども、次回からまだ７回もございますので、ぜひ小出ししながら最後の着地点に向かってよろしくお願いします。

横山委員

事務局に宿題ですが、このパンフレットの２ページ目で、72 年の政令市、昭和 47 年、どういうプラスが政令指定都市になることによって出てきたのか、それを少し政令指定都市ごとにピックアップしていただければ。逆にいうとマイナスになったという点もあるかもしれない。そうでないとやみくもに我々勉強したって意味がないから。それだけお願いします。

与田座長

仙台市の例とか、直近の例でもってたくさんメリット、デメリットという話が出てきていますから、資料でおわかりになっている分であれば、この点に関してはメリット、デメリットで。私はいつも講演会をやるときはメリットもデメリットも山ほどあると言っているんですけれども、それは見方だと思うんですけれども、今ご指摘のように読んだってわからない、はっきりわかれば、資料をお持ちだと思うので、出していただければなと。次の議事録を送るときにお願を申し上げます。

事務局

資料をわかる範囲で，用意させていただきます。

きょうはどうもありがとうございました。本日の会議はこれにて終了させていただきます。

－以上。